寛永整版本『竹齋』に増補された播磨侍の挿話について

松本　健

一、はじめに

大正六年に『近代小説史』[1]として纏められた藤岡作太郎氏の東京帝国大学での講義の遺稿に、仮名草子『竹齋』の解説がある。

全篇滑稽を主とし、所々に狂歌を入れたり。是によりて当時狂歌の流行せしを知るべし。……さて此の物語は京都より江戸に下りし案内記なれども、地理の事は客にして、むしろ小説寓言を主とせり。中に某上人の説法の滑稽、竹齋が療治の失敗、などの事あり。同じく滑稽にても當時の理窟張りたる滑稽を見るべし。此の書頗る行はれたりと見え、種々模倣の書出で、……遂には竹齋も歴史的人物となりて芭蕉の狂句にも取り入れられ、「木枯の身は竹齋に似たるかな」の吟を見るに至れり。

一部の引用であるが、ここには仮名草子『竹齋』の概観が殆ど言い尽くされているように思える。近世初期に成立し、大変な人気を博したこの作品には、藪醫師（やぶくすし）の滑稽な旅と共に当時の世相も生き生きと描かれており、多くの研究者の興味も惹き付けてきたのである。しかし、如何に人気の高い作品ではあっても、その研究の進展はやはり段階的なものであった。昭和四十九年に鈴木亨氏は、「『竹斎』について」[2]において次のように述べている。

『竹斎』は仮名草子研究史の初期から注目を集めてきた作品で、未開拓な分野の多い仮名草子の研究の中では、著しく解明の進んだ作品であると言える。書誌的研究、註釈、作者及び成立時期の考定など、最近の成果は殊に目ざましい。しかしその恵まれた条件にも拘らず、作品そのものの研究は捗々しい進展を遂げているとは言い難い。

仮名草子の名作として人々に親しまれてきた『竹斎』ではあったが、そこに語られているものの本質について、はっきりとした見解が示されることはなかったわけである。しかしその後、ある一つの論点がその研究に確かな動きを与えることになった。それは、古活字版本と寛永整版本[3]の本文異同の問題であった。寛永整版本は、本文に少なからず手を加えられて出版されたものであり、そのこと自体は成立時期の考定などにおいて早くから指摘されていたことであった。しかしその改訂には、本文全体の意義を問わずに看過するには忍びない内容と分量をもつ不可解な増補も含まれており、研究が待たれる状況にあったといえるのである。昭和三十六年には朝倉治彦氏によって対校本[4]も出版されたのであるが、具体的な研究が始まったのは昭和五十年代に入ってからのことであった。本文の改訂の意味を考えることは、取りも直さずこの作品の存在の意味を考えることであり、当然のことながらその後の論考の多くが、『竹斎』そのものがもつ役割と作者の意図とに言及することになったのである。

本稿は、先行研究の本流に沿って、『竹斎』の根本的な構想を読み解くことの足掛かりとして、寛永整版本に施された本文の増補に対して検討を加えるものである。その際に重要となるのが、これまでにはあまり注意されることのなかった発想、〈同じく滑稽にても當時の理窟張りたる滑稽を見るべし〉という前掲の藤岡氏の言葉である。

二、挿話をめぐる先行論

患者も寄り付かない貧しい生活に愛想を尽かし、旅に出ることを決意した藪醫師の竹齋は、先ず、都を見納める京内参りへと出掛ける。由緒ある寺社仏閣や人々の享楽の有り様を一通り眺め、帰宅しようとしたそのときに、彼は黒谷での切腹にまつわる噂話を聞き付けることになる。

古活字版本と寛永整版本の本文異同の問題として最も注目を集めたのは、この噂話の箇所である。この噂話は寛永整版本になって増補されたものであるのだが、その長さが、挿絵を含めると寛永整版本全体の四分の一にもなる二十丁に及ぶ上、その内容も、竹齋と無関係に見えるものであるため、何とも不可解な変更箇所として読まれることのあった部分である。

それは、薬師参りで出会った若衆を見初めた播磨侍の話であった。気持ちを押さえ切れずに手紙を送り、想いを募らせていたある晩、この侍の宿にその若衆が訪れる。感激して愛情を語り、幸せな一夜を過ごすが、その若衆は主人がいる身なので二度と会うことはできないと言った。月日は流れ、侍は寂しい思いに耐えていたが、そこに届いた風の便りは、若衆の病死を知らせるものであった。衝撃を受け、嘆き悲しんだ侍が考えたのは次のようなことであった。

……やがて後より御伴して、三途の川にて追付きて、御目に懸り申さんと、落つる涙を押し止め、自害をせんと思ひしが、待てしばし我が心、君亡くならせ給ひたる御墓所へ参りつゝ、七日の内は御跡を弔ひ申、その上と思ひ定めて、……黒谷指して参りけり。

若衆が埋葬されたという黒谷へ来て、その墓を見つけた侍は、世の無常を感じながら七日間の弔いを始める。しかし、ようやく迎えた切腹の当日、侍のもとに寄親が駆けつけて来たことで事態は急変する。事情を耳にした彼らの主人が、〈天下の恐れ、世の聞え〉のために切腹を禁じ、それに背けば親類一同、寄親までをも死罪とする旨を伝えてきたことを知るのである。すると侍は、

所詮某一人は面目を失ふ共、數多の罪を救はんと思ひ申せば、何事をも畏り候

と言って、自害を止めてしまったのである。

これが、寛永整版本において増補された、切腹にまつわる噂話の粗筋であるが、この部分は、井浦芳信氏の「古活字本『竹齋』の研究――假名草子における流動性[5]」においては、

この長い挿話は前後の文に對し又この竹齋の物語のテーマに對して分量や内容において甚しく不調和不自然な存在としか考へられないもので、竹齋自身との關聯は僅かに男が東下りをしたといふ結末に見出し得ないこともないといふ程度に過ぎず、……直接關係は無いと言つてよいであらう。

と述べられ、また、野田壽雄氏の「『竹齋』論」[6]では、

別にどうということもないつまらない挿入で、竹齋とは関係無い。どうしてこういう挿入をしたか、その理由も分からない。

と言及される等、主に否定的な扱いを受けてきた箇所であった。

しかし、矢野公和氏の「竹齋――世を批評する新たなスタイル――」[7]以降、この挿話に積極的な意味を見出そうとする見解があらわれ始めるのである。まず、矢野氏はこの場面について、

ここには、衆道の誠という個人の情念が、武家社会の秩序と齟齬を来たし、敗北せざるを得ないという形で、体制内に生きる武士の悲哀が語られていると云えよう。

という解釈を示し、『竹齋』には、世の中、特に幕藩体制を〈批判〉する役割があったとする読み方を提案したのである。そして、その論は、「風化の凝視者――『竹齋』序説――」[8]へとつながり、寛永整版本における本文の改訂は、当初からこの作品に備わっていた批判の精神を、より洗練された形で表現するために施されたものであったということを示したのである。

その後、高橋清隆氏の「仮名草子『竹齋』小論」[9]には、

私はこの部分を、作者の人生に対する切ないあこがれが噴出したところと見る。……作者の人生に対する切ないあこがれというのは、作品中では衆道関係という極端な形に変えられているが、要するに、他人との真の触れ合いである。

と、記される。高橋氏の考えでは『竹齋』とは、他人と真に触れ合うことへの憧れを抱きながらも、それを消極的に放棄して彷徨する〈無気力〉の作品であり、黒谷の話は、その憧れを噴出させる唯一の場面ということになるようである。

それから、石井裕子氏は、「『竹齋』考」[10]において、

これだけのものを、それまでに出来上がっている話に加えてしまうということは、やはり何らかの理由や目的がなくてはでき得ないことである。そこで考えられる一つの理由としては、男色の流行である。……風潮の中、『竹齋』にも男色を求める読者が増えるのは当然である。そうすると板が新しく変わることもあって、多少の不自然さは残るものの、この黒谷の切腹事件を二十二丁余りにも及んで、書き加えるに至ったのではないだろうか。

という見解を示している。寛永整版本における増補の理由を、読者や流行という観点から考えているわけであるが、これは『竹齋』が、読者に喜ばれる〈おもしろさ〉というものを求める方向性を備えていたという発想に基づくものである。

また、石川了氏は、「『竹齋』の変容――滑稽・諷刺・紀行の視点から――」[11]において、

この増補の目的は、義を欠く男色侍への批判ではなかったか。……途中に誠しやかな心情等が書き綴られていて一見惑わされるが、この男が侍として思慮が浅く念者として義を欠くことは言を俟たない。

と述べている。標題にあるとおり、滑稽・諷刺・紀行が石川氏の『竹齋』の読み方であるわけだが、特に寛永整版本における本文の増補には、〈諷刺性〉の強調という役割が有ると見做されるようである。

このように、不可解に思われていた増補部分にも積極的な意味を見出そうとして、『竹齋』の読み方は、様々に提案されたわけである。しかしそこには、反対する意見も寄せられている。

入口敦志氏は、「『竹斎』考」[12]において、

……整版本では、古活字本にあった竹斎の物語という性格を薄める方向の改訂が行われている。またそれと並行して、……竹斎とは直接関わらない教訓や学道論への傾斜や敷衍がみられる。そういった傾向の最たるものが、整版本の京内参りの最後の部分に増補されている黒谷での衆道の一件である。この部分は竹斎とは何の関係もなく、……全体の統一を大いに妨げていることは言をまたないであろう。

〃

整版本にせよ古活字本にせよ『竹斎』には体制批判などといったものはないのではないか……。

と、述べている。入口氏は、矢野氏の意見を真っ向から否定し、『竹斎』が、徳川氏〈賛美〉の基調を持っているとまで明言するのである。

また、田中宏氏は、「整版本『竹斎』の研究（その二）」[13]において、

成程この侍が思慮浅い点は、言われる通りである。が、……この播磨侍の心情に同情しているのであり、諷刺的には語られていない。

〃

……整版本の大きな異同はむしろ、書誌の営業サイドからの理由に結びつけて考えた方が納得が行き、彼等にそれ程遠大な社会批判、ましてや将軍批判を期待する事は考えられないし、作品の内容からもうかがうべくもない。

と、述べて、石川氏及び矢野氏の意見を批判している。さらに、「整版本『竹斎』の研究（結び）」[14]においては、

新たに加わった挿話の出来については、……決して『竹斎』の文学性を高める上での価値を認める訳にはいかない。但し、商品としての価値と言う事になれば話は別である。確かに読者に親近感を与える上では、大きな役割を果たし

ていたに違いない。

と、述べる等、本文全体の内容とは切り離して、この挿話の意味を考えることを提案しているのである。

寛永整版本に施された、切腹にまつわる噂話の増補は、賛否両論ありながらも多くの注目を集めたことは事実である。そして、その解釈を試みれば、『竹齋』全体の読み方への言及を余儀なくされることもまた事実のようである。矢野氏の〈批判〉、高橋氏の〈無気力〉、石井氏の〈おもしろさ〉、石川氏の〈諷刺性〉、いずれも『竹齋』の持つ要素を的確に示しているように思われながら、それを導き出す手続きとなる増補部分の読解は、それぞれに全く異なるものであった。諸氏の見解を否定する意見をも考え合わせれば、さらに、その統合は遠くなるのであろう。『竹齋』は挿話の集合体のようなものである。あらかじめ用意された読み方をすれば、それらはどのようにでも読めてしまうはずである。増補部分への注目という一つの切り口によって表面化してきてしまったのは、仮名草子の名作として親しまれていながら、結局のところ、『竹齋』が何を語っているものなのかということについてすら、未だに通説が無いということだったのである。

『竹齋』の読解には、増補された挿話の検討が不可欠のようである。次節からは、これまでに触れられることのなかった素材をもって、この挿話部分の読み方についての具体的な提案をしていきたいと思う。

三、當時の理窟張りたる滑稽

この播磨侍の挿話について検討する上で、先ずその切腹未遂騒動の舞台が黒谷であったことに注目したい。金戒光明寺の建てられているこの土地は、安元元年（一一七五）、法然房源空が庵室を結んだことに始まる浄土宗四箇本山の一つである。播磨侍が、若衆の埋葬された黒谷へ、弔いと後追いのために参ったところで、彼の期待感を代弁するように、この土地の由来が語られる。

そも此黒谷と申は、法然上人開山寺、古の事かとよ、熊谷の二郎直實が、敦盛を手に懸けて發心起し、頭を剃り、蓮生坊と言はれし時、師匠と頼み奉る、高僧源空法然様御靈跡なれば、ひとへにこれは頼もしく、来世の事も疑ひ無く、……

ここで注意したいのは、熊谷二郎直実について触れられていることである。『平家物語』や『源平盛衰記』においては、一の谷で敦盛の最期を見届けて発心を起こしたところまでが語られ、父性の武将としての印象が強い直実であるが、この黒谷には、彼の出家後の姿が伝わっていたのである。

法然の死後、浄土宗の発展とともに、開祖の生涯を絵画化した「法然上人絵伝」が盛んに作られてきた。その集大成が、鎌倉時代末期に舜昌法印が四十八巻に編纂した知恩院の『法然上人行状繪圖』であり、その中に「熊谷蓮生の巻」が存在する。ここにその一部を、悳谷隆戒氏の翻刻[15]から引いてみる。

建永元年八月に、蓮生は明年二月八日、往生すべし、申すところもし不審あらん人は、きたりて見るべきよし武藏國村岡の市に札を立させけり。つたへきくともがら、遠近をわかず、熊谷が宿所へ、群集する事いく千萬といふ事をしらず。すでに其日になりにければ、蓮生未明に沐浴して、禮盤にのぼりて高聲念佛體をせむる事、たとへをとるにものなし、諸人目をすますところに、しばらくありて念佛をとゞめ、目をひらきて「今日の往生を延引せり、來九月四日、かならず本意を遂べし、その日來臨あるべしと申ければ、群集の輩あざけりをなしてかへりぬ。妻子眷屬、「面目なきわざなり」と歎ければ、「彌陀如來の御告によりて來九月をちぎるところなり、またくわたくしのはからひにあらず」とぞ申ける。

法然坊源空に帰依し蓮生と号した直実は、阿弥陀如来の本願を信じて念仏をひたすら口称してきた。すると建永元年（一二〇六）、翌年二月八日に自らが往生することを予言し、高札を立てて観衆を集めたのである。ところが、その当日になって突然往生の延期を発表し、人々の嘲笑を買ったということである。結局のところ、直実は二度目の予言に沿って往生を遂げたとされているのであるが、『竹齋』に描かれた播磨侍の切腹未遂騒動は、この有り様を彷彿させるものではなかっただろうか。

『法然上人行状繪圖』は、浄土宗の興隆により、寛永二十一年（一六四四）には『黒谷上人傳繪詞』と題して版刻されるに至ったが、それ以前にも盛んに複写されていたのである。井川定慶氏の『法然上人繪傳の研究』[16]では、副本たる室町

前期の當麻本、永祿元年（一五五八）の燈譽本、天文九年（一五八一）の三慶本、慶長十二年（一六〇七）の德富本など、『竹齋』以前の複写本を確認することができる。また、『法然上人行状繪圖』より若干早く、延慶四年（一三一一）に作られた『法然上人傳記』（『九巻傳』）にも、この部分はほぼ同じように著されていたことが、知恩院の『法然上人傳の成立史的研究（対照篇）』からわかるのである。

寛永整版本『竹齋』の作者や身近な読者たちが、黒谷という土地を直実の往生延期の説話と結び付けて考えることができていたとするのならば、播磨侍の挿話の読み方というものは自ずと決まってくるのではないだろうか。若衆への愛情の深さとこの世の無常を、故事や美文をちりばめながら長々と語ってはいるが、この騒動の舞台が黒谷という土地であったことで、切腹は結局は未遂に終わってしまうということが予定されていた滑稽な内容であったと考えられるのではないだろうか。

思い起こせばこの播磨侍の切腹には、常に延期の願望が寄り添っていたのである。若衆の死を知った場面でも、先に引いていたように、〈自害をせんと思ひしが、待てしばし我が心……〉と、供養に理由をつけて切腹を延期し、また、いよいよ切腹の段取りとなったところでも、

腹を切らんと思ひしが、きつと思ひ出したり。此事傍輩衆にも、又は一人二人残し置きたる郎等にも知らせざりければ、況んや頼みたる人もよも知らじ。我空しくなる後にて、氣も違ひたるか、又は最期の時、手前忘却してうち忘れたるかなどゝ言はれては、同じ黄泉と言ひながら口惜しかるべし、いざや寄親まで一筆残さんと思ひて、硯料紙を引寄せて、筆取り上げんと……

といったように遺書を書くことを思いついて、その準備をしているうちに駆けつけて来た寄親を迎えてしまうのである。さらにその寄親と話をしているうちに彼等の主人の使者まで到着してしまって、自害は中止となるのである。そして、この噂話の最後は、

其後又黒谷に引籠り、かの御跡を懇に弔ひて申て、月日を經て、今日の明日のとせしかども、人に見ゆるもうるさく

も、面目無しとや思ひけん、都の内を忍び出、東の方へ下るとかや。

と、結ばれる。結局のところこの播磨侍は、切腹の決意をしながらも常に延期の理由を欲しており、邪魔が入るのを待っていたようにも思われるのである。

このようなことから思い起こされるのは、『徒然草』第五十九段の一節である。

大事を思ひ立たむ人は、さりがたく心にかゝらむことの本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。しばし此こと果てて、同じくはかのこと沙汰し置きて、しか〳〵のこと、人の譏りやあらむ、行末難なくしたゝめまうけて、……など思はむには、えさらぬことのみいとゞ重なりて、事尽くる限りもなく、思ひ立つ日もあるべからず。大様人を見るに、少し心ある際は、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。（新日本古典文学大系『方丈記　徒然草』による）

出家を発心するにあたっての決定的な条件「諸縁放下」の徹底が説かれている段であるが、播磨侍の有り様はまさしくこれに似ており、〈しばし此こと果てて〉と、七日間の弔いを執り行い、〈しか〳〵のこと、人の譏りやあらむ、行末難なくしたゝめまうけて〉と、何通もの遺書を準備し始め、そして結局は、〈えさらぬことのみいとゞ重なりて、事尽くる限りもなく〉なって、切腹をやめてしまったわけである。切腹未遂の挿話が、既に『徒然草』で指摘されていたような、生半可な決意の見苦しさを著したものと考えることができるのならばそれは、前節で紹介した矢野氏、高橋氏、田中氏のようにこれを、播磨侍への同情的な視線をもって真摯に語られていると読み取る見解は、適合しないものとなる。

『法然上人行状繪圖』ばかりではなく、『吾妻鏡』などにも、直実が、周囲の人間を困惑させるほどの直情径行の性向をもっていたことが伝えられているのである。[18] 切腹騒動を起こす播磨侍は、呆れられるべき人物造形であったと考えられるのではないだろうか。

ここで、『田夫物語』という仮名草子について触れてみたい。寛永整版本『竹齋』より少し後、寛永後期（一六四〇頃）に出版された、男色と女色の優劣論争を描いた作品であり、石井氏と石川氏も前掲の論文で、『竹齋』の挿話との関連において言及していたものである。

……『田夫物語』にみられるように、田夫者（女色黨）と華奢者（男色黨）との論争に託して、男色の不自然で社会に有害なものであると説いた作品も刊行されるに至ったのである。つまり、こういった男色否定の書があらわれなければならない程、男色は新しい地盤に根を張り、強力に支持されていたことがわかる。　（石井裕子氏「『竹斎』考」）

そもそも寛永期は、同六年に禁止された女歌舞伎に代わって若衆歌舞伎が全盛を迎え、男色が流行した時期であり、男色女色論を扱う『田夫物語』などでは、殉死の例をあげて武家社会における男色の義を主張している。播磨侍の一件も、こうした背景と無縁ではあるまい。となると、この増補の目的は、義を欠く男色侍への批判ではなかったか。

（石川了氏「『竹斎』の変容――滑稽・諷刺・紀行の視点から――」）

当時に男色の流行があったことに異論はないのだが、稿者の『田夫物語』の読み方は、それぞれに異なる両氏からもさらに離れたものである。道で出会った男色愛好者と女色支持者の論争が描かれているわけであるが、そこには両者の言い分を冷静に、そして半ば呆れながら聞いている〈われ〉という視点人物も登場しているのである。

われも笑止さ、をかしさに、堤のへりに腰うちかけ、渋団扇を腰にさしながら、あからめもせず双方の言ふことを聞きゐたり。

（日本古典文学全集『仮名草子集　浮世草子集』による）

と、論争の始まりを促し、そして、

われあまりの笑止さに、中に分け入り、「夜も更けば里の門もさされなん。はやはや帰りたまへ。重ねての問答にしたまへ」と言へば、たがひに別れて北へ去り、南へ去り行きけり。

と、論争の終わりを締めくくっている、この〈われ〉の視点こそが、作者の表現したかった彼等への眼差しであろう。つ

まり、男色を〈不自然で社会に有害なものであると説い〉ているのも、〈武家社会における男色の義を主張している〉のも、『田夫物語』の登場人物たちであって、『田夫物語』そのものではないということである。白熱する両者の言い分が、和漢の故事などを引いて権威付けをしようとするほどに、その滑稽性は増すものであり、議論の不毛性が強調されているのである。男色愛好者を華奢者（風流な都会者）と、呼んだ時点で、嗜好の理解や融和は放棄されているといえるのである。

重要なのは、当時に男色の流行があったかどうかということなのではなく、それがどのように見られていたのかということである。中世恋愛物語風の形式と大袈裟な言い回しによって語り尽くされてきた男色話は、既に目新しいものではなく、むしろ辟易されていたことすら想像できるのである。『田夫物語』が主張していたのは、衆道の是非などではなく、そのようなことに躍起になっていることの滑稽性だったのであろう。

『竹齋』の挿話に戻ってみると、饒舌に語られる男色の義や切腹中止の言い訳、さらに黒谷という土地の由来に対しては、作者と当時の身近な読者たちの間に負の方向を向いた共通の認識が備わっていたことが想像できるわけであり、播磨侍の切腹騒動は、〈當時の理窟張りたる滑稽〉として読むべき箇所ではなかったかと考えられるのである。

四、反語的な方法

寛永整版本『竹齋』における播磨侍の切腹未遂の挿話は、衆道の誠を問うような真摯な内容ではなく、大仰な恋愛作法の前時代性を笑い、そのようなものへの憧れの底の浅さを皮肉ったものであったと考えられるようである。ここではそのことについて、また別の角度から検討を加えてみたいと思う。

切腹未遂の長い話が紹介された後、竹齋は次のような反応を示している。

此竹齋と申も、かの謂を懇にうち聞きて、さてもあはれの御事やと、眼玉の抜くる程、思ふやうに泣きければ、夕立雨の如くにて、野邊の草木も流れける。

結局のところ切腹をしなかった播磨侍のエピソードに対して、竹齋にこれほどの反応をさせているのはどういうことな

のか。前出の先行論でも、このことに触れているものがある。

この滑稽な迄に誇張された表現が意味するのは、この男に対して比類のない憐情を感じている竹齋も又、そうした世の中に絶望しているであろうということと、にもかかわらず、彼がそれを全うな形では表わし得ないことの二つに他ならない。

（矢野公和氏「竹齋――世を批評する新たなスタイル――」）

ストーリーの展開上、ここで竹齋がこれほど大げさに涙を流す必然性はどこにもない。無責任な旅・治療の中にあっては、かえって異質であるとも言えよう。ストーリーの展開上、竹齋が泣く必要はなかったとすれば、ここで泣いていたのは作者にほかならない。

（高橋清隆氏「仮名草子『竹齋』小論」）

……竹齋のオーバーな流涕でもわかる通り、この播磨侍の心情に同情しているのであり、諷刺的には語られていない。

（田中宏氏「整版本『竹齋』の研究（その二）」）

それぞれに『竹齋』の読み方は異なるものの、いずれの意見も竹齋の涙を正直に受け止めているものである。そして、そこに共通しているのは、この場面において竹齋の示している感情が、そのまま作者の感情であるという認識である。しかし、竹齋に涙を流させることによって作者が表現したかったのは、本当に憐情や同情だったと言えるのであろうか。

寛永整版本でこの部分に増補されたのは、この播磨侍の話だけではなく、竹齋が古い友人を訪ねる話も添えられているのである。一条通付近に住む裕福な友人に、旅立ちの挨拶をしようと立ち寄ったところ、竹齋はその友人から謂れの無い非難を受けてしまう。大金を拾いながら、それを隠しているのは水臭いというのであるが、それは、その友人が餞別を竹齋に与えることを惜しんでの芝居だったのである。友人に施すことを惜しんでいると悟られないように、芝居を打っていち早く相手に、友人に施すことを惜しんでいるという非難を浴びせるという見事な笑話であり、世の人々の小賢しい有り様をよく表していると考えられるエピソードであるが、ここで注目したいのは、この場面で竹齋が、生真面目に、自分は大金を拾っていないと言い張っていることである。笑話としてのおもしろさと同時に、竹齋の単純無垢な性格が強調され

ている場面といえるわけである。

この話の意味を踏まえて提案したい発想は、夕立雨の如く涙を流したのは単純無垢に造形された竹齋だけが示した反応なのであって、播磨侍の切腹未遂に対して作者が表現したかった感情は、むしろ憐情や同情というものとは別のものではなかったのかということである。作者が示したい感情をより強調するために、敢えて正反対の表現を用いるということは、ここより時代が下ればそれほど珍しいものでもなくなってくる。

佐藤信夫氏は、『わざとらしさのレトリック――言述のすがた――』[19]における漱石の修辞研究に際して、全ての言語表現は、言葉で真実は語り得るという発想に拠った〈まことしやか〉な表現方法と、言葉では真実は語り得ないという発想に拠った〈わざとらしさ〉の表現方法の、どちらかを目指すものとして分けられると述べている。

それらの言葉を近世文学研究の術語として用いたのは、堀切実氏の「『好色一代男』の文体とリズム――わざとらしさのレトリック――」[20]であり、そこでは西鶴の文体について、

> ときおりみせる〝わざとらしさ〟の表現と、その〝わざとらしさ〟のなかに〝まことしやかさ〟を含んだ表現、それに〝まことしやかさ〟のなかに〝わざとらしさ〟も感じられる表現とに、最大の特色があるとみられる。

と分析しているのである。〈まことしやか〉という言葉については、両氏の意味の認識には多少の違いがあり、堀切氏の使う〈まことしやかさ〉は、佐藤氏の〈わざとらしさ〉に含まれるものではないかと思われ、ここでは検討を控えたいのであるが、〈わざとらしさ〉という言葉は、まさしく『竹齋』の修辞を考える上で、重要な概念ではないかと思われるのである。

切腹を中止してしまう播磨侍にも、夕立雨の如く泣く竹齋にも、さも真っ当な理由があるように語られていながら、その表現があまりにも大袈裟なものであれば、そこには〈わざとらしさ〉という意識を読み取ることができるだろう。これは竹齋などの登場人物が、わざとらしく振る舞っているということではなく、作者の語り口に〈わざとらしさ〉があるということである。

言い換えるならば、播磨侍の切腹未遂に対して、無垢なる竹齋が示す反応には、反語的な役割があったと考えることが

できるということである。つまり、竹齋が流した大袈裟な涙は、先行論に言われてきたように、作者の意識のあらわれとして文字どおりに読み取るべきものではなく、意味を裏返して読み取るべきものであったことになるのである。それは、この挿話全体をある種のいぶかしさをもって読むことを促しているものであり、延いては、『竹齋』全体の反語的精神をあらわしていると考えることもできるものである。

この切腹未遂の挿話には、播磨侍に同情するような表現はあっても、非難や疑問を示すような表現は全く使われていない。だからこそ、これは高等な皮肉であり、竹齋の大袈裟な反応に、読者にこの挿話全体をどのように読むべきなのかをはっきりと教える、指標のような役割を与えていたと考えられるのである。

ところで、花田富二夫氏の「『竹齋』東下考」[21]には、この切腹騒動のモデルとなった可能性の高いある事件の存在が紹介されている。それは、慶長十二年の尾張清須城主松平忠吉の死去に際しての、家臣小笠原堅物の殉死と、さらにその後を追った小姓佐々木清九郎の切腹のことであり、彼等はそれぞれに衆道関係にあったというのである。時好性という『竹齋』の特徴を考えれば、モデルの事件の存在は十分に期待できることであるが、重要なのは、その真偽よりも、このような事件に対しての眼差しがいかなるものであったのかということであろう。最終的に予告往生を遂げた熊谷直実や、切腹を全うした清九郎らのモデルと目される人物たちを充分に彷彿させておきながら、播磨侍に結局は腹を切らせなかったことで表現したかったのは、衆道の誠などではなく、言い訳がましさの滑稽性の方であったろう。実際のモデルがどのような事件であろうとも、このように茶化した話に書き換えたところには、衆道においてしばしばみられるような大仰で前時代的な恋愛作法に対する冷ややかな眼差しがあったと考えられるのではないだろうか。

五、おわりに

これまで述べてきたように、寛永整版本における播磨侍の挿話の読解には、反語的な方法への意識というものが必要であったと考えられるわけである。そして、そのような発想は、『竹齋』全体を読むにあたっても大変重要な役割をもつものと見做すことができるようである。詳しくは稿を改めるが、この先の療治の場面や名所巡りの場面などでは、竹齋の縦横無尽な言動が描かれてゆくのである。竹齋の示す感情を、そのまま作者の感情と認識してしまっていると、一部の先行

論がそうであったように、時として様々に異なった表情を見せていく竹齋に、それぞれ違った理由を与えながら、場面によって恣意的に読み方を変えていかなければならなくなるのである。ここに、反語的な方法に対する意識を導入することができれば、それらに整合性のある読み方を与えることができるのではないかと考えられるのである。

そこで提案したいのは、この播磨侍の挿話が増補された理由について、あらかじめ古活字版本『竹齋』がもっていた視線の当代性と表現の反語的精神を、よりわかりやすくするために施されたものであったという解釈を立てることである。もちろん、このように寛永整版本において指摘される特徴をとりあげて、古活字版本に内在していた精神を読み取ろうとする姿勢には反対する意見もある。前出の入口氏と田中氏の論考はそのような方向性をもつものであった。そもそも、古活字版本の作者と寛永整版本の改訂者は同一ではないとする考え方が有力であり、そのことはこれらの本の比較を始めた井浦氏以来、殆どの論者が気に留めていたことでもあったのである。

しかし、『竹齋』という作品は、案内記、狂歌物語、職業咄、滑稽本など多岐にわたるジャンルを生み出すもとになったことからもわかるとおり、そもそもさまざまな読まれ方をする可能性を内に有していた仮名草子である。改訂によって変化した部分を、拡大された要素と考えることができるのならば、この作品がその時代において、どのようなポイントに焦点をあてて読まれていたのか、また読まれるようにされていたのか、ということを知ることができるはずである。それは、『竹齋』という仮名草子を取り巻いていた当時の人々の思考や発想の一端に触れる重要な手段ということになるのではないだろうか。

寛永整版本における播磨侍の挿話には、当時の社会に見られた一部の人間の有り様に対しての、皮肉に満ちた眼差しがあらわされているといえる。しかし、ここで注意しなければならないのは、皮肉に満ちた眼差しというものは、それ以上でも、それ以下でもないということである。つまり、この挿話の描き方にあるのは、同情と呼べるものではないということと同じように、批判と呼べるものでもないということである。『竹齋』の読み方が各氏によって割れ、〈賛美〉や〈批判〉などの対極的な言葉によって語られたのは、この作品が決定的な方向性を見せるものではなかったからなのである。世の中の実態を辛辣に描きながらも、それらを深追いして裁定を下すことなどはせずに、この世の真実として通過する風景の中に見せている。それがこの『竹齋』の方法と精神であったのではないだろうか。

古活字版本『竹齋』より少し前に、『恨の介』や『薄雪物語』といった中世恋愛物語風の仮名草子が世に生まれている。

『竹齋』の成立や改訂にはこれらの作品からの影響も大きいことが推測されているが、その精神は全く異なるものとなったようである。

『竹齋』を読み解いていくことが、近世の初期から急激なる多様化を見せ始めた嗜好や価値観というものを照射していくことに繋がっていくと考えて間違いはないであろう。

注

本稿における『竹齋』本文の引用は、日本古典文学大系『假名草子集』からのものである。

(1)『近代小説史』・大倉書店・大正六年一月

(2)『島大國文』第三号・島根大学教育学部国語研究室・昭和四十九年二月

(3) 古活字版本は元和七年から九年の間（一六二一～二三）、寛永整版本は寛永三年から十二年の間（一六二六～三五）に成稿し出版されたことが、松田修氏の「『竹齋』の成立――假名草子の時好性――」（『国語国文』第二七一号・京都大学国文学会・昭和三十二年三月）によって明らかにされている。

(4)『竹齋〔対校本〕』・古典文庫・昭和三十六年十月

(5)『近世國文學』第一輯・千歳書房・昭和十七年八月

(6)『近世初期小説論』・笠間書院・昭和五十三年四月

(7)『国文学　解釈と鑑賞』第四十五巻九号・至文堂・昭和五十五年九月

(8)『国語と国文学』第五十八巻十一号・東京大学国語国文学会・昭和五十六年十一月

(9)『日本文芸論叢』第一号・東北大学国文学研究室・昭和五十七年三月

(10)『人文論叢』第三十九輯・二松学舎大学人文学会・昭和六十三年七月

(11)『国文学　解釈と鑑賞』第五十五巻三号・至文堂・平成二年三月

(12)『語文研究』第七十号・九州大学国語国文学会・平成二年十二月

(13)『近世初期文芸』第十号・近世初期文芸研究会・平成五年十二月

(14)『近世初期文芸』第十七号・近世初期文芸研究会・平成十二年十二月

(15)『勅修御傳　法然上人行状繪圖』・平樂寺書店・昭和十八年八月

(16)『法然上人繪傳の研究』・法然上人傳全集刊行會・昭和三十六年三月

(17)『法然上人傳の成立史的研究（対照篇）』・知恩院・昭和三十六年三月

(18)『法然上人行状繪圖』には、しきりに往生の兆しを訴える直実に対して、用心や謹みを促す法然の書簡文が記されている。また、『吾妻鏡』には、文治三年八月四日、鶴岡八幡宮放生会流鏑馬において的立役を拒んだために所領を没収されたこと。建久三年十一月二十五日、久下直光との地境争論において頼朝の前での弁明に苦心し、怒りに任せて調度文書を簾中に投げ入れ髪を断ち、伊豆走湯山に走ったこと。同年、彼を連れ戻すために人々が骨を折ったが、結局は無駄になってしまったこと等が記されている。

(19)『わざとらしさのレトリック――言述のすがた――』・講談社・平成六年十一月

(20)『近世文芸　研究と評論』第五十八号・早稲田大学文学部・平成十二年六月

(21)『大妻女子大学紀要――文系――』第二十三号・平成三年三月